

齋藤 ちさと

びじゅつの欠片

この作品は Instagram に投稿した画像、言葉、また投稿画像の情報を極限まで減らし版におこして刷った版画の集積による。

人間として生きているといつも何か欠けていて全てを満たすことは出来ない。私たちに子どもがいない。

私たちというのはわたくしと夫の間のことで理由はあるがない。とにかくいない。今言えることはただそれだけだ。

子どもがなく、社会における子育てに如何に参加することが可能か？ と、考えると、教育だとか地域貢献とか孤独感に悩みながら子育てしているお母さんたちを威嚇しないように。とか、か、な。

非常に陳腐ではあるけれど、これらの要件を満たすことは可能。

しかしその人、子どもたちに対する保護者としての責任はなく、良くも悪くも結局傍観するしかない。

そのような立場で子育てやそれと美術の関係について語ることは本来おこがましい。とは思いつつ。私が出来ることはと言えば、次の時代を生きる人々に有形無形の何かを残して伝える。また残そうとする意志を持つ。ということくらいだ。

インターネットが出現して以来、様々なデータがネット上に浮遊していて、例えば誰かが亡くなってもその人の SNS のアカウントは墓標のように残っていたりする現象に興味深く見ている。

私たち美術家は実体としての作品を残すことができるけど、亡くなった後の作品管理は私たちの手の外にある。

さらに時間を経て残すかどうか決めるのは未来の人々。

例えば 100 年後、今回制作した版画、Instagram のアカウント。

どちらかが残っているか、どちらもなくなってしまうかもしれないし、どちらも残っているかもしれない。今の私には判断がつかない。

世界から「美術」という領域が消滅している可能性すらあるのだから。

この作品では、2015 年秋から Instagram のアカウントに美術の与太話を 100 年後の人々をイメージして投げることから始めた。

一人の人間がフォローできる範囲は限られていて、全体から見ると断片のさらに欠片くらいの情報量だけ。

それでもやっぱり美術は面白いものだから、未来の人たちもいろいろ見れたらいいよね。と、ささやかな希望を込めて。

さいとう・ちさと

1971 年東京都生まれ。仏教と素粒子論に共通する「世界は点や粒で出来ている」という考えにインスパイアされ、粒や点を通して世界を見るための写真・映像・インスタレーション・本などを制作している。既婚。

<https://www.instagram.com/saitobandochisato/>